

## 大会研究主題

「新しい時代を生き抜くため、豊かな心と自ら学ぶ力を育てる  
放送・視聴覚教育の果たす役割を推し進めよう。」

### 研究主題解説

#### 1. 「新しい時代を生き抜く」という表現の基底にあるもの

- (1) **高度に成長した情報化社会の中で、様々な情報に対して自ら正しく選択・処理する態度や能力を身に付け、それを常に自己の向上と社会の発展のために生かしていこうとすることが、新しい時代を生き抜くために求められています。そして、その学習基盤を充実することが私たちの責任であると考えます。**

平成 13 年に施行された、高度情報通信ネットワーク社会形成基本法（IT 基本法）では、「すべての国民が、インターネットその他の高度情報通信ネットワークを容易にかつ主体的に利用する機会を有し、その利用の機会を通じて個々の能力を創造的かつ最大限に発揮することが可能になる、もって情報通信技術の恵沢をあまねく享受できる社会」を実現することを目指しています。

現代社会では、経済・生活・文化のあらゆる場面で情報化が進展する中で、大量の情報の中から取捨選択をしたり、情報の表現やコミュニケーションの効果的な手段としてコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用したりする能力が求められるようになっていきます。

このような高度情報化社会の中で、多様な情報を受け止めながら適切に活用できる人間の育成を果たすことが大切です。

- (2) **子どもたちのすべてが、一生を通じて学びながら、豊かに生き抜こうとする姿勢と生活技術の体得を確実にする学習の充実こそがこれからの課題であると考えます。**

21 世紀は、社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す知識基盤社会化やグローバル化の状況において、「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっています。平成 20 年 1 月の中央教育審議会答申で提言された「効果的・効率的な教育を行うことにより確かな学力を確立するとともに、情報活用能力など社会の変化に対応するための子どもの力をはぐくむため、教育の情報化が重要である」ことを受けて、現行小・中・高等学校学習指導要領において、情報教育、及び教科指導における ICT 活用について充実が図られています。そのような社会の中で、学校現場では大型デジタルテレビ(電子黒板)やタブレットパソコンをはじめ ICT ツールの整備が急速に進みつつあります。また、デジタル教科書や高解像度ビデオ・オーディオ等の放送番組、Web 上の情報などが増えてきています。今後は、それらを教材化し、活用した授業展開が、ますます広がり、深まることが期待されます。

これからの社会の中を生き抜くことができる人間を育成するためには、映像媒体・メディア特性、情報通信ネットワーク等を生かした学習基盤を充実すること、そして、豊かに生き抜こうとする姿勢と生活技術の体得に向けた支援を充実することが重要です。このこともまた、私たちが今次大会の実践研究の基底におくべき課題だと考えています。

## 2. 「豊かな心と自ら学ぶ力を育てる」という表現の基底にあるもの。

### (1) 「豊かな心と自ら学ぶ力」を育てるとは？

**知識基盤社会で生き抜くためには、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和（知・徳・体のバランス）を重視する「生きる力」の育成が課題です。**

私たちは、情報・放送教育において、興味・意欲を喚起する働きや、心に響かせ感情に訴えることができるような音声・映像作品などを適切に活用することによって、心をたがやすことの一助となるのではないかと考えました。また、コミュニケーションツールとしてメディアを活用することにより、子どもたちが「学ぶ楽しさ」を感じ、「事象への好奇心」や「学び続けていく意欲（意志）」を持つであろうと考えました。このような人間としての温かさ、たくましさを培う教育実践を積み重ねることで、豊かな心、自ら学ぶ力が育成され、伸長されると考え、実践研究を進めているところです。

### (2) 研究会が自ら築いてきた研究遺産を受け継ぐ

かつて私たちは「未来をきりひらき、たくましく生きる人間の育成をめざし、“発展する学習”を追究する放送教育をすすめよう」を研究主題として取り組んできました。

これは、「子どもたちの一人一人が環境に適応し、問題解決に積極的に挑もうとする知的好奇心、すばらしい出会いに感動する豊かな心、それをより深め、広げるために必要な情報を選択・処理し、それを生活に還元して活用していく能力、さらに困難にひるまず自己実現を図っていく熱意、それらを支える強靱な意志・体力・そして自己を受容し他者を尊重しながら、地域の中で毎日を懸命に生きようとする努力や熱意を体現していく過程の積み重ねによって成就し得る」ととらえ、このことを放送・視聴覚教材の有効活用と関わらせながら研究成果を積み重ねてきました。

今次大会の基底にも自分たちが築いてきたこの視点と成果を研究遺産として確かに受け継ぎながら実践研究を進めています。